

氏名・（本籍） 首藤 祐介（愛知県）

学位の種類 博士（心理学）

報告番号 甲 第112号

学位授与年月日 2014（平成26）年3月19日

学位授与の要件 学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）

第4条第1項該当

論文題目 随伴性判断に影響を与える要因の研究

—試行間隔と反応密度が与える影響の検討—

審査委員（主査） 坂 井 誠

永 田 法 子

神 谷 栄 治

尾 入 正 哲

学位請求論文審査報告書

本論文は、反応とその結果という事象間の関係の強さを判断・推測する、随伴性判断という枠組みから、抑うつリアリズム理論を検討した実験研究である。

従来、自己や現実世界に関する認識の正確さと精神的健康には関連があると考えられてきた。なかでも、抑うつ者の判断はネガティブに歪んでおり、非抑うつ者の判断は正確であると言われてきた。しかし、近年、抑うつ者こそが正確な判断を行っており、非抑うつ者はポジティブな方向に判断が歪んでいるという、抑うつリアリズム理論が提唱された。この理論では、抑うつ者の示す正確な判断を抑うつリアリズム、非抑うつ者の示す楽観的な歪んだ判断を統制の錯覚と呼び、そのメカニズムの解明が精力的に行われてきた。しかし、いまだ未解決な問題が残されていた。本研究は、先行研究の問題を洗い直し、抑うつリアリズム現象が生じる手続き・操作を明らかにすることを目指している。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章では、抑うつと随伴性判断に関する研究を概観している。まず抑うつリアリズム理論について概説し、この理論の提唱者である Alloy&Abramson（1979）に始まる随伴性判断に関する一連の実験研究を詳細に検討している。そして、先行研究の分析結果をもとに、抑うつリアリズムが生じる環境条件を探ることこそが、抑うつ的な思考の発生の解明に寄与するということを指摘している。

第2章では、これまでの抑うつリアリズムに関する研究結果が、必ずしも一貫していない、つまり、抑

うつリアリズム現象が「もろい」現象である理由を検討し、従来の多くの研究が採用している実験手続きの問題を指摘している。そして、抑うつ者を対象にする、あるいは気分誘導を行うのではなく、一般成人を対象にした被験者内実験計画による実験を行う意義を明らかにしたうえで、抑うつリアリズムが生じる環境条件を明らかにする必要性を論じている。そののちに、本論文の研究目的として次の3点を提示している。すなわち、試行間間隔における妨害課題が随伴性判断に与える影響の検討（実験1）、非随伴事態において反応密度が反応－結果関係の評定に与える影響の検討（実験2）、随伴事態において反応密度が反応－結果関係の評定に与える影響の検討（実験3）、である。

第3章では、大学生を対象にしたパーソナルコンピューターを使った実験によって、試行間間隔における妨害効果が随伴性判断に与える影響を検討している（実験1）。まず、随伴性判断課題の各試行間の時間である試行間間隔（Intertrial-Interval：ITI）が抑うつリアリズムの発生要因であるとする、Msetfi et al.（2005）のITI仮説の不備を明らかにし、ITIにおける妨害課題の挿入が随伴性判断に影響を与えるという仮説を立てている。そして、この仮説を検証する実験を行っているが、仮説は支持されていない。しかし、ITIが反応密度に影響を与え、反応密度が反応－結果関係の評定に影響を与えた可能性を発見している。このような知見から、抑うつ気分が反応密度に影響を与え、反応密度の違いが反応－結果関係の評定に影響を与えているという示唆を得ている。

第4章では、実験1の結果から、非随伴事態における反応密度の差異が随伴性判断に与える影響を検討している（実験2）。その結果、低結果密度では反応密度の差による評定に偏りは生じないが、高結果密度では反応密度の差による評定の偏りを認めている。すなわち、高反応密度では実際の随伴性よりも反応－結果関係を高く評定し、低反応密度では評定の差は生じなかったことを明らかにしている。

第5章では、随伴事態における反応密度の差異が随伴性判断に与える影響を検討している（実験3）。日常生活場面は、非随伴事態だけでなく随伴事態もあり、ヒトの行動は随伴事態においても大きな影響を受ける。そのために、正・負の随伴事態下における反応密度の違いが反応－結果関係の評定に与える影響を調べている。その結果、反応密度は正負両方の随伴事態で正の方向の評定の誤りを生じさせるが、その偏りは負の随伴事態で明確な評定の差として現れることを明示している。

第6章では総合考察を行い、本論文の成果と今後の課題がまとめられている。本研究はITI仮説を推し進めた結果、正の随伴事態、非随伴事態、負の随伴事態の全てにおいて反応密度が反応－結果関係の評定に影響を与えることを明らかにし、抑うつ気分は反応密度を媒介として反応－結果関係の評定、つまり随伴性判断に影響を及ぼすと結論付けている。

以上、本論文は行動理論に準拠した随伴性判断研究として位置づけられる。そして、これまでの知見に反応密度の重要性を付け加えたという点で、この研究領域の発展に大きく貢献しており、高く評価できる。しかし、実際のうつ病者にみられる悲観的思考の解明や予防につながると、首藤氏は述べてはいるものの、克服すべき課題は多い。特に、一般大学生を対象とした実験研究であり、臨床群を対象とした研究ではないという意味では、やはり方法論的な限界が垣間見えてくる。これからの研究の深化に期待したい。

本論文の内容に関して公聴会では、ITIの妨害課題に問題はなかったのか、ITIの問題をさらに深化させる実験はできなかったのか、なぜITIから反応密度の研究に進んでいったのか、この研究が臨床にどのように応用できるのか、などの質問があった。しかし、このような質問への的確な回答から、首藤氏が専門分野について相応の学識を有し、自立して研究を進める資質と能力を持つことが確認された。

以上を総括し、学位審査委員会は一致して、本論文を学位請求論文として合格であると評価した。